
命を消す命

堀田マサヒコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
命を消す命

【Nコード】
N9225L

【作者名】
堀田マサヒコ

【あらすじ】
ロボット・安楽死をテーマにしたショートショート。

これはさほど遠くない未来のお話。

私は、命を消す命として生まれた。今日も命を消す。

「よろしいですか？ 何か最後にかける言葉は？」

「あなた……生まれてきてくれて、出会ってくれて、一緒に住んでくれて、本当にありがとう。私はあなたに出会えてよかった。私もすぐに向かいますからね……」

老夫婦の妻の最後の言葉を認識。私は生命維持装置のスイッチをいつものように切った。この装置のスイッチさえ切れば、五分と経たずに誰もが死んでしまう。それが私の仕事だ。

たとえ周りが騒ごうが、むせび泣こうが、私には私の仕事、使命がある。ただスイッチを切ることだけが、私のアイデンティティだ。仕事終わりには必ず心電図から音がする。定期的に脈打っていた心臓が止まる。無機質な音が、私の仕事の終わりの合図だ。

「患者さまの死亡を確認しました。それでは、失礼します」

私は言葉を認識することも話すこともできるが、基本的には決められたことしか話さない。命を消すときの確認と、命を消し終えたときの確認と、立ち去るときの挨拶だけ。あとは時々話す医師とのどうでもいい会話の相づちだ。そのまま病室を立ち去ると、私のクライアントである安藤医師が待っていた。

「今日の仕事はもう一件ある。患者はもう事前にリヴィングウィルを示している。延命措置はいらないそうだ」

「そうですか」

そう。私は安楽死だけを行う専用のロボットだ。

「そういえば、君が作られたきっかけとこのをあまり話していなかったな」

「きっかけですか？」

「うん。安楽死というのは百年以上前から議論がされている。君は

高瀬舟という小説を知ってるかな？」

「知りません」

「まあそうだろうな。いつか機会があつたら読んでみるといい。高瀬舟という小説の中で安楽死がテーマに語られている。一九一六年に森鷗外が書いた小説だ。逆に言えば、百年経った今でも問題になるということは、そう大して人間は成長していないわけだ」

「そうですね」

「君が作られた理由は知っているかな？」

「私は父に作られました」

「山本さんだな。優秀なロボット技師だ。政府は安楽死問題についてこういう答えを出した。安楽死を人間が行うと倫理的問題が起くる。ならば人間ではないものにさせよう。例えばロボット。お役所さんは山本さんに役目を与えたわけだ。そして君を作った。君のアイデンティティもね」

「はい。私は人を楽にするのが仕事です」

「かわいそうだな、君も。死者に何も感じないなんて」

安藤医師の言葉は時々分からない。これまで何人も楽にしてくれた。それに何かを感じる人間の方が、おかしい。泣く、叫ぶ、怒る。そんな感情は無益だし無駄だ。

「次の患者がいるのはこの部屋だ。入ってくれ」

安藤医師の側を離れず、次の患者が待つ部屋に入った。いつものように延命装置によって体中にチューブが巻き付かれた人間が眠っている。今回は男のようだ。しかも若い。

「患者の名前は山本卓。三五歳。ロボット技師だな」

嗚呼。私は動けなかった。いつもは簡単に歩けるのに、脚が錆びついたかのように重く動かない。どうして動かないんだ。

安藤医師は淡々と患者の情報を私に伝える。

「山本さんは進行の早い癌患者だったらしい。幾度と手術をしていたがどうやら病院に行くのが遅かったようで末期症状に陥ったようだ。身よりの人はいない。だから看取るのは私たちだけだな」

どうして。どうして私には教えてくれなかったのか。私ならばもっと早く安藤医師に伝えられたのに。もっと早く治してあげられたのに。

「リヴィングウィルも示されている。延命措置はいらない。安楽死させてくれと。さあ、準備してくれ」

私のことを一番分かっているのに。私のことを一番愛してくれていたのに。私の為に生きている人を、私は、殺すのか――？

「どうした。いつもみたいに。落ち着いて」

私の恩人。私の創造主。私の制作者。私の親。私の――

「どうしたんだ、いったい。早くしないか。何か言いたいことでもあるのか？」

私は――

「私は――」

「ん？」

「この人の命を消せません」

私は私は私は、何もできません。私のアイデンティティは崩れました。私はこんなことしたくありません。私はこんなことをする為に生まれてきたわけではありません。

私は殺せません。

だけど。私は。

「おい！ どこへ行く！」

私は部屋から飛び出した。私が親を殺すくらいなら。私が私を殺した方がましだ。まだその方が良い。後ろから安藤医師の声が聞こえる。私はロボット。人間とは違うと思っていた。でも人間は。山本さんは。お父さんは。私を人間にさせてくれた。だから私はせめて人間らしく死にたい。

屋上のドアを無理矢理こじ開けて、そのままフェンスをよじ登る。安藤医師が来ないうちに早くしないと。

「よろしいですか。最後の言葉は。――私は、命を消す命。私の命は、私が消します」

最期に見たのは雲一つない六月の青空――

病室のドアが開く。白衣が乱れた安藤医師が私に近づいてくる。

「どうでしたか？」

「死んだよ。彼女は。身を投げた」

「そうでしたか」

「全く残念だ。私が作ったロボットに人間の心を与えてしまった気はなかったのだが」

「そうですね、安藤医師」

「君は人間の心がなかったな。山本卓さん」

「そうですね、安藤医師」

「作り直さないとな。安楽死をするロボットが親くらい殺せなきゃ意味がないだろう。ただ、君はよくやってくれた。ロボット制作者がロボットだとは思わないだろうからな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9225/>

命を消す命

2010年10月8日14時43分発行